

(71)

氏名(生年月日)	フジ 藤	エ 江	サチ 幸	コ 子
本籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第885号			
学位授与の日付	昭和63年2月19日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	成人のファロー四徴症に関する臨床的観察			
論文審査委員	(主査)教授 広沢弘七郎			
	(副査)教授 高尾 篤良, 教授 梶田 昭			

論文内容の要旨

目的

成人のファロー四徴症は長年続いた低酸素血症および二次性多血症による多臓器障害の合併や心機能の低下により小児期とはその臨床像を異にするといわれている。本論文では成人ファロー四徴症の臨床像を明確にし今後の本疾患の治療の指針となることを目的とした。

方法

対象は1979年1月より1986年12月まで当科に入院した心内修復術未施行の20歳以上のファロー四徴症42例である。男性26例、女性16例であり年齢は21歳から57歳までで平均31.6歳である。全例に血液一般、血清生化学等の臨床検査を行ない、一部の症例についてはホルター心電図を併用した。全例に両心カテーテル検査を施行し、左室造影から Dodge らの面積、長さ法により左室容積を算出した。

結果

1) 臨床検査所見 死亡例と生存例とを比べると特徴的な違いはなかった。

2) 心カテーテル所見 LVEDP, RVEDP の高値の症例が多く認められた。左室容積は正常に比べ必ずしも小さくなく弁膜症合併例で有意に大きかった。LVEF は正常値に比べ有意に低下していた。

3) 合併症 中枢神経系合併症は16.7%、腎障害は38.1%、高血圧は11.9%、高尿酸血症は33.3%、出血傾向は19%、感染性心内膜炎は11.9%、心不全は7.1%であった。上室性不整脈を75%に心室性不整脈を75%に認めた。

4) 転帰 2例は肺動脈低形成のため内科的に経過観察した。35例に心内修復術を施行し5例に姑息手術のみ施行した。死亡は4例で手術死亡2例、遠隔死亡2例であった。

考察

成人まで心内修復術を施行しないで経過した症例もシャントの閉塞や右室流出路の心筋肥大が進行すると低酸素血症や二次性多血症が高度となり、合併症も多く出現してくると思われる。死亡例で拡張能の低下の指標とされる両室の EDP の上昇がみられた。慢性の低酸素血症により心筋のコンプライアンスが低下し EDP が上昇することによると思われた。

結語

1) 心内修復術未施行の20歳以上のファロー四徴症42例について検討した。

2) 合併症としては中枢神経系合併症16.7%、腎障害38.1%、高尿酸血症38.1%、高尿酸血症33.3%、出血19%等であった。

3) 生存例に比べて術後死亡例の臨床検査所見に特徴的な所見はなかったが心カテーテル所見では有意に LVEF が低下し、LVEDP, RVEDP の高値が認められ、成人ファロー四徴症の手術死亡に関与する重要な因子であることが示唆された。

論文審査の要旨

チアノーゼ性心疾患の中では、最も長命になり得るとされているファロー四徴症も成人例は極めて少ない。そして、幼小児期とは異なった特徴を持つようになる。その根治療法は近年の心臓外科のレベルの進歩と共に全く実用的なものとなってきている。

本研究はこのような成人年齢まで、長生きしたファロー四徴症の各種臨床像につき、両心カテーテルを中心にして論じたもので、臨床心臓病学的に価値あるものである。

主論文公表誌

成人のファロー四徴症に関する臨床的観察

東京女子医科大学雑誌 第57巻 第12号
1612～1623頁（昭和62年12月25日発行）

副論文公表誌

- 1) 緑内障患者の狭心症に硝酸剤は禁忌か？
呼吸と循環 35 (4) 405～409 (1987)

- 2) 腫瘍と血栓

medicina 24 (6) 1070～1079 (1987)

- 3) 後天性弁膜症（僧帽弁・三尖弁）

Medical Companion 6 (10)
1321～1330 (1986)